OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	C.F. ブレーマーの詩学をめぐって : 模倣説の復権と新たな想像力概念の模索
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2001, 1, p. 13-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

C.F.ブレーマーの詩学をめぐって

―模倣説の復権と新たな想像力概念の模索―

福田　覚

1　忘れられた詩学書

本稿では、初期啓蒙主義時代の詩学の歩みを知る上で、時代の一つの証言となりうるであろう著作を取り上げる。この著作は、『作詩術の正しい理解についての根本的考察』という書名で（以下『根本的考察』と略記）、出版地はポーランド領「ダンツィッヒ」、出版年は「1744 年」となっている[1]。記述はすべてドイツ語で書かれている。著者はカール・フリードリッヒ・ブレーマーであるが、いま現在この著者は、ドイツ文学関係の研究者にとってもおよそ名の知られた人物とは言い難い存在となっている[2]。ヨアヒム・ヤコプ・シュラーダー市長への献辞の中には、生まれはダンツィッヒではないが、この街に育てられて市民の一員となったので、ここが自分にとって真の祖国である、という下りが見られる。また、冊子の冒頭に市長の名を冠する理由の一つとして、自らの名が知られておらず、それを自分でも意識している、ということが述べられているので、当時も無名の存在だったのかも知れない。

ただし本稿は、忘れ去られた著作に再びもしくは新たに輝きを与えようと企図するものではない。我々がブレーマーのテクストに関心を寄せるのは、それが、初期啓蒙主義という思想構造のもとで典型的にあり得たと思われる詩学の形を示していると感じられるからである。そうした意味で、テクストを「啓蒙主義」時代の証言と見なして、テクストが結論を与えるようとする過程で思考を拘束的に規定しているきわめて啓蒙主義的な前提的構造を浮き彫りにしていくことが本稿の姿勢となる。

この『根本的考察』は、序文および導入部分（§1-15）を除けば、歴史篇（§16-73）と理論篇（§74-215）の2部構成となっている。古代と近代という明快な新旧の歴史意識に支えられており、理論面ではポエジーの本質を論じる詩論と、その表現面を論じる文体論とを織りまぜた内容になっている。

読者に語りかけている「序文」によると、語ることの術について古代ギリシアやローマの非難の余地のない規則とすばらしい模範が残されているにもかかわらず、近代の修辞学・詩学・説教学などは不十分なもので、「フィロロギー」（この語は、このテクストでは、言葉を用いるための学を広く指している）は改善されなければならない。ブレーマーは、そうした「フィロロギー」の改編を近代における哲学の改編と重ね合わせて捉えている。

「デカルト、ライプニッツ、ヴォルフは哲学を全く別の状況におき、一般の生活にも、他のすべ

ての分野の利用にも都合のいいものにした。事物一般ととりわけ我々の心についての認識が拡大され、堅固なものとされた。それゆえ、フィロロギーもよりよい状態にすること、より根本的に、より詳細に論じることが我々にとって不可能だとはもはや思われないのである。」

ブレーマーは、道徳論、自然法、政治学などが、形而上学的な基盤なしには、体系的かつ根本的に論じられないように、修辞学や詩学にとっては、記号による表象や言語一般などについての学が基盤として必要である、と考えている。こうした学問はまだ存在しないが、哲学、とくに根拠論と心理学を基礎に据えたものとなるので、哲学が大きな転回を経たいま「フィロロギー」は革新の好機を迎えている、とされる。

ブレーマーによれば、「フィロロギー」に含まれる諸学の役割は、「理性と美徳を人間に対して言葉を介して伝えていくこと」である。重要なことはその手段を目的に合致したものにすることだが、「規則なしにはどのような意図も確実には達成されない」、という。こうした面に、啓蒙主義的な規範詩学を目指す姿勢が窺える。「フィロロギー」に強固な基盤を与えるのに必要となるのが、「確かなものを不確かなものから慎重に区別」する批判精神である。「批判(Critik)は、あらゆる書物を規則に従って判定する。」哲学の成果を援用し、規則の生成と規則による判定とを軸として新たに「フィロロギー」を形成することがブレーマーの狙いである。

こうした問題意識は、「導入」(§1-15)部分からも読みとることができる。ブレーマーによれば、学問分野には、認識について問う第一義的な分野もあれば、認識や表象をさらに表現することについて問う分野もある。後者は前者を前提としており(§4)、前者はヴォルフ哲学によって解明が進んでいる(§2)。こうした記述から見て、ヴォルフ哲学をすべての学の出発点と捉え、自らの論考についてもそれを新たな基盤としようとする熱意は疑う余地がない。

このテクストが論じる作詩術(Dichtkunst)は、当然、表現に関する分野であり、それは人間のうちにその真理が与えられるので「主観的」な分野であると規定され(§3)、さらには、規則に基づいて何かを行う「手段的分野」(§5)の一つとされる。作詩術は言葉を手段とするので、「フィロロギー」の一分野であり、「手段的分野」には理論的なものと、理論を踏まえた実践的なものがあるが、作詩術は規則の総体であるので理論的と解される(§10)。およそこうした体系の網の目を張り巡らせながら、その中での位置を確定することが、一つの学問を十全に規定する上での「導入」となっているのである。

2 ブレーマーの詩学史観

第1部の歴史篇は3つの章に分かれ、アリストテレス詩学を中心とした古代ギリシア、ホラティウスの詩論を中心とした古代ローマが主題化されて論じられたあと、古代受容の多様性という形でフォシウス、ボワロー＝デプレオー、ヴォルテール、オーピッツ、ラシーヌ、ベーコン、ゴットシェート、バウムガルテンらの詩の捉え方が議論されている。

古代ギリシアの文芸観を主たるテーマとした第1章は、さらに時代を遡って、人類がまだ未開の状態にある段階から有している詩の啓蒙的な役割が論じられている(§16)。これは啓蒙主義の観念によって再構成された一種の詩の起源論である。その後、ポエジーと音楽が分離していくが、韻文という形式の中に、起源における音楽との結びつきは潜在的に残される(§17)。ここから、作詩術の本質は韻を踏んだ書法にあるという表層的な考えが生じ、ギリシア人の見方を規定してしまうが(§18)、「真実らしい創作と寓話によって、それと気付かない形で快く、人間に対してある種の教えを与え、言い聞かせ、情念や感情の動きを浄化し、そして意志をよい方向に向けさせる」ことこそがポエジーの本質である、と洞察しえた者もいたとされる(§19)。

こうした助走の後、アリストテレス詩学を中心に古代ギリシアの詩論の検討に入っている。アリストテレスが扱っているジャンルは、喜劇・悲劇・叙事詩・酒神賛歌の四つであり(§20)、随所の記述から証明されるように、それらの本質は「模倣」である、と考えられている(§21-22)。「模倣」とは一般に似たものをつくることだと考えられるが、では、言葉による模倣にはどういうことが可能なのか。ブレーマーはそのように問うことで、一種の詩と絵画の比較論をも展開している(§23)。言葉による模倣は、現実の対象を模倣するか(§23)、現実には存在しない対象を真実らしく創り上げるか(§24)のどちらかであるが、アリストテレスは後者のみをポエジーだと考えている。行為の模倣とは、ファーベル(筋立て)の創造に他ならない(§25)。このような議論をゆっくりと重ねながら、ブレーマーは、リアリティのある真実らしいファーベルの創造を詩的な模倣と見なすのがアリストテレス詩学だと結論づける(§30)。またこうした点では、ブレーマーの見るところ、「カンパネラの詩学、フォシウスが書いたポエジーの本質についての書、ダシエのアリストテレス詩学への注解、ゴットシェートの批判的詩論」も、アリストテレスから逸れてはいるが、アリストテレスに何ら新しいものを加えてはいない(§30)。ブレーマーは、こうした詩の本質についての結論に、詩の目的が楽しませることと教化することであるという確認(§32)とを加えて、それをアリストテレス詩学の要諦であるとしている(§33)。

続く第2章のテーマは古代ローマである。古代ローマでは、アリストテレス的な文芸観と通俗的な文芸観とが混淆しており、英雄詩・悲劇・喜劇・牧歌はアリストテレス的な考え方を保持しているが、その他のジャンルでは通俗的な考え方に従っている、というのがブレーマーの見立てである(§41)。この時代の理論的著作は「大いに欠乏」していて、ホラティウスが詩について書き残している僅かなこと以外、ギリシア人の賛美や模倣の段階に留まっているものが大半である、との判断から(§42)、ホラティウスの詩論の部分部分を細かく引用しては論評を加えることに紙数が費やされている。そうした検討の結果、ポエジーについてのホラティウスの考え方には、アリストテレス的な見解と通俗的な見解が混在している、と結論づけられ(§54)、ローマ時代の種々の創作例についてもこの混在ぶりが確認された後(§55-58)、この「混在」が古代ローマの特徴であると最終的に断じられる(§59)。

続いて第3章においてブレーマーが描く近代の詩の概念をめぐる状況は、様々な相争う考え方が見出される混乱状態である(§60)。しかし、それを理解のために整理する段になると、やはりブレーマーは詩論の歴史を二つの系譜という視点で振り返っている。著者の意図を反映する形で

「通俗的理解」と呼ばれている韻律論の系譜は、近代でも常に多くの支持を集めている、と言われる(§61)。それに対して、先に「アリストテレス的理解」と呼ばれていた模倣説の系譜は、ブレーマーの診断によれば、この時代になって信奉者が最も少なくなっている(§62)。その考え方を純粋な形で保持している者はほとんどいないとされ、わずかな例外としてジャン・ルクレールの名が挙げられている(そこでブレーマーが典拠としているのは、ゴットシェートが 1725 年に翻訳して紹介したルクレールの文章である)。

このあとブレーマーは、近代における代表的な詩学者について個別的な論評を展開しているが(§63-69)、概括すれば、おおよそ近代は古代ローマのホラティウスの延長上で詩の本質について思索していて、そうした点に限界性がある、とブレーマーは捉えていたように読みとれる。こうした流れに対して、アリストテレス的な模倣説をそれにふさわしい形で初めて復権させているのがフランシス・ベーコンである、とするところにブレーマーの詩学史観の最大の特徴がある。ベーコンについて多くの紙数を割いて論じた後(§70)、ゴットシェート、ボードマー、ブライティンガー、バウムガルテンにコメントして(§71-73)、詩学史を振り返る第1部の論述は閉じられている。

3 ベーコンの学問体系とブレーマーの詩の分類法

ブレーマーが近代詩学を考える上で最も重視する人物はフランシス・ベーコンである。そして、こうしたベーコン像の核となっているのがその学問体系である。

ブレーマーは、歴史篇第3章において、ベーコンの『学問の尊厳と進歩』から次の一節を引用している。

> 「人間の認識の最もすぐれた分類は、おそらく、その活動の場である心の三つの能力を我々に与えてくれる分類であろう。歴史は記憶力に、詩は想像力に、そして哲学は理性に属する。しかしここで我々が詩というのは、創作された歴史、あるいは、ファーベルのことである。韻文というのはある種の文体にすぎず、それは言葉の技術に属するものである。それについては、しかるべき場所で論じる。歴史は本来、時と場所に規定された個別の事物にのみ向かうものである。・・・上述の意味での詩は、やはり個別の内容を表現するにすぎないが、しかしその内容というのは創作されたものであり、本当の歴史において起こることと類似した形で創られているものである。しかしその結果、詩は時としてその限界を乗り越える。そして、絵画のように、自然の中では出会うことのない内容さえも結びつけるのである。」(『学問の尊厳と進歩』第1章、訳出はブレーマーのテクスト S.88 より。引用中の中略もブレーマーによる。)

ベーコンは、『学問の進歩』(1605)やラテン語で書かれた『学問の尊厳と進歩』(1623)において、認識主体である人間の心の能力に関係づける形で、知の体系を歴史と詩と哲学とに分けて分類している。詩は本当の歴史に類似した形でつくられるフィクションであるとされて、想像力という悟性能

力とダイレクトに結びつけられている。一般に、フィクションとリアリティ、あるいは、フィクションにおけるリアリティという図式には、芸術の模倣構造において規定される想像力の活動様態の問題がある。詩の領域を想像力の活動領域として定義することで、知の体系における芸術の位置づけが与えられるが、ベーコンの体系は、想像力を記憶と理性の間に置く理論モデルの一つの典型である。

ベーコンが与えたこの知の体系は、後に18世紀の百科全書派に体系構想の基礎を与えることになった。ダランベールは、悟性の能力を「記憶」と「理性」と「想像」とに分けた「人間知識の系統図」をベーコンの学問分類とともに百科全書に掲げている。もっともダランベールは、「理性」と「想像」の順序を入れ替えるという重大な変更も行っている。それについて、百科全書の序論には次のような記述が見られる。

> 「これら三つの能力が、さしあたり、私たちの体系の三つの一般的分類と人間知識の三つの一般的対象を形づくる。すなわち、記憶に結びつく『歴史』、理性の成果である『哲学』、そして想像が産みだす『芸術』。私たちはこのように理性を想像よりも先に置くが、私たちの見るところでは、この順序の方が道理によくかない、精神の働きの自然的な進歩に一致しているのである。想像は一つの創造的な能力であり、精神は、創造することを夢見る前に、自分が見るものと知るものについて推理することからまず始めるのである。理性を想像よりも先に置くように定めることになるもう一つの理由は、想像というこの心の最後の能力の中には、ある程度までそれと統一されて他の二つの能力も存在し、またそこで理性は記憶と結びついている、ということである。精神が対象を創作したり想像したりするのは、ただ、その対象が、精神が直接的観念や感覚によってすでに知っている対象に似ている限りにおいてのみである。精神がこういう対象から遠ざかるのに比例して、彼が作り出す存在は奇怪なものになり、楽しさの少ないものになる。こうして『自然の模倣』においては、発明自身がある規則に服している。」[3]

ダランベールは想像力について「模倣しつつ創造する」能力であるとも述べている。ダランベールにとって想像力は対象を表象する能力ではないが、それはダランベールがそうした表象能力は「記憶そのもの」に他ならないと考えているためである。ダランベールによれば、「直接的観念の対象について推理する」のが理性であり、それらを「模倣する」のが想像力である。ベーコンのテクストと比較すると、ベーコンにとって議論の力点が想像の飛翔にあるのに比して、ダランベールにとっての議論の力点は想像の制御にあるように思われる。ダランベールが理性と想像の順序を入れ替えているとしても、それはロマン主義的な意味で想像を自由に飛翔させるためではない。創作や想像は「対象に似ている」ことが条件で、そこに模倣の楽しみがあるとされている。想像は記憶と理性の間にはないが、この二つの能力を統一した形で含んでいる。

視線をもう一度をベーコンのテクスト『学問の尊厳と進歩』、およびそのベーコンを引用している初期啓蒙主義のブレーマーの詩論『根本的考察』の方に向け直すと、ベーコンは、想像力の活動の場であるとした詩の領域をさらに3つに分類していることが見て取れる。そしてブレーマーは、先の引用に続く形で、実際に詩について論じている『学問の尊厳と進歩』第13章から、詩のジャンルに

ついて触れた箇所をかなり長々と引用している。そこでは、詩は「現実の歴史を随意に模倣するもの」であると説明されたあと、叙事的・劇的・寓話的の3種に詩が分類されている。

> 「叙事的な詩は、単に歴史を模倣するだけのものである。時として内容をあまりに高尚なものにしすぎることがなければ、容易に歴史と取り違えてしまうことだろう。劇的な詩は、いわば目に見える歴史である。歴史が出来事を過去のものとして提示するのに対し、出来事を、絵を見ているように、いま現在目の前にあるものとして見せてくれるのである。最後に、寓話的な詩は、写し出す像を伴った歴史であり、我々に対して悟性の諸真理を感覚的に分かるものにしてくれる。」(引用はブレーマーのテクスト S.90 による)

実際の引用箇所ではさらに、個々の詩のタイプに関する論述が続き、最後にブレーマーが、「こうした思想を注意深く見てみると、ベーコンが現実にアリストテレス的な理解を保持していて、それをただ筋道立てて拡張しているだけだということが容易に見て取れるであろう」(S.93)という短いコメントを付して、この歴史篇第3章におけるベーコンへの言及を終えている。

ベーコンの知の分類体系では、記憶、想像力、理性といった悟性の能力に基づいた知の領域の分類があり、想像力の領域である詩についてジャンルによる分類がその下位分類として存在しているのであるから、哲学と詩学の関係は、悟性の能力の分類と詩の分類が上位分類と下位分類という関係におかれる中で、悟性の能力論が詩学内部における体系の分節化においてどのような影響を与えているかという形で問われることになる。詩の分類が歴史との対比で考察されているため、想像の在り方を記憶の再現の在り方として考えていると見ることもできる。詩における想像力の活動は、単に記憶を再現するだけもの、目に見える形で現前化して再現するもの、具体的な像を伴って再現するものに区分されている。

少し結論を先取りして言うと、ブレーマーの詩学の主たる関心は、詩学の在り方を韻律論や文体論にシフトしたスタイルからアリストテレス的な模倣説へと引き戻し、反省的な詩学、当時の言い方で言う「批判的」な詩学に向かうことにある。そのときにブレーマーが頼りとしているのがベーコンの学問体系の考え方である。また、ブレーマーが求めるその模倣説の中心的なテーゼの一つには、模倣には必ずしもリアリティが求められるものではないという主張がある。こうしたことから、ベーコンの知の系統分類を念頭に置きながら詩の分類を悟性の能力論に関係づけて読み直せば、ブレーマーが漠然と前提としている「想像力」概念を描き出すことができるように思われる。ここではそのために、ブレーマー独自の詩の分類法から確認しておくことにしたい。

ブレーマーの詩学の基本姿勢は、ポエジーと称することのできる言語芸術の総体を、ファーベル(創話)と詩的イメージ(詩的描写)とに分ける点に存する。ブレーマーの場合、こうした区別は、創作としてのポエジーによって表象されるものの区別に由来している。理論篇である第2部の第1章「創作とその真実らしさ」において、ブレーマーは、その構成要素である諸部分が同時には存在せず、継起的に存在するものを「出来事」と呼ぶと定義した後(§76)、創作もそうした区別に従って分類されなければならないとして、「出来事」を表現する創作が「ファーベル(創話)」であり、構成要

素の全てを同時に有するような対象を表現する創作が「詩的イメージ(詩的描写)」である、という風に規定している(§77)。

その構成が同時的か継起的かという基準によって表現対象を分類して見定め、創作を把握するための詩学の基本的な分節化にそうした区分けを導入するという論法は、そのような形で詩と絵画の比較を行ったレッシングの『ラオコオン』(1766)を先取りするものと言えるだろう。また、第2部の理論篇におけるブレーマーは、第1部の歴史篇を通じて、ファーベル概念によってポエジーの本質を捉えようとする古代ギリシア以来の考え方について検証済みであるから、ポエジーをファーベル(創話)と詩的イメージ(詩的描写)という形に二分するこうした分類法には、伝統的なファーベル概念の重みを相対化しようとする意図も感じられる。例えば、同時代のゴットシェートの『批判的詩論の試み』は、ポエジーの本質を自然の模倣であるとした上で、それを、絵画的な描写、他者の演技、ファーベル(筋立て)の創出という3段階に分けて論じて、ファーベルの創出をポエジーの最高段階としているので、こうした意味での姿勢の違いははっきりしている。ブレーマーには、ファーベル概念を核とした模倣説の伝統をそのまま継承しようという意識は感じられない。

ベーコンは詩を叙事的・劇的・寓話的の三つに分けていて、ブレーマーもファーベルをさらに分類することで、叙事的ファーベル・劇的ファーベル・詩的イメージの三つに分けているが、ブレーマーの分類は対象が継起的か否かという観点を、隠された意味をもっていて象徴的か否かという観点よりも上位の分類基準としているために、それぞれの三分類は一致しない。ブレーマーはまずベーコンの分類について、叙事的な詩とは象徴的な意味合いをもたないもの、寓話的な詩とは象徴的な意味合いを隠し持つものであると見ている。ベーコンが、記憶の再現の在り方として考えていた想像は、象徴的な意味合いをもたない単なる再現、現前化を伴う再現、具体的な像に象徴的な意味合いをもたせた再現という風に捉え返されている。そして自らの分類では、叙事的なファーベルと劇的なファーベルとが継起的な対象を、詩的イメージが同時的な対象を描くものとしているため、叙事的なファーベルも象徴的な意味合いをもっていれば、ベーコンの分類では寓話的となり、詩的な描写でも、象徴的な意味合いがなければ、ベーコンの分類では叙事的とされる[4]。

問題はここからである。ブレーマーは、知の体系において想像力という能力に一つの明確な位置を与えているベーコンの地平に立ちながら、自身の与える詩論、その根本的な構想において、想像力の働きをさらに詳細に規定することはしていない。韻律術ではなく模倣説をという主張に終始する詩論の中で、その想像力概念は不鮮明な現れ方しかしていない。しかし、私見に拠れば、ブレーマーの詩論の基本的な主張は、ほぼ想像力の問題へと収斂するものである。そのことを捉えるために、ブレーマーの規定する詩とその表現対象との関係をもう少し詳しく見てみたい。

4 ブレーマーの想像力概念と「ラオコオン論」の図式

ブレーマーの詩論は模倣説の伝統を取り戻しつつ、さらにその再定義と超克を試みるものと受け取れるが、その模倣説の最大の特徴は、詩がリアリティを追求することにある種の制約を課している

ように思われる点にある。そしてそれは、表現対象との類似という課題を遂行する場合に、それが現実との類比を意味する場合と、詩に隠し持たせる象徴的な意味合いとの類似である場合とで、想像力の在り方が変わることを示唆しているように受け取れる。以下ではこうした議論を中心にたどっておきたい。

ブレーマーは、理論篇の五つの章のうち最初の一章を詩的なリアリティの問題に割いている。ブレーマーにとってそれは、「創作された虚構が読者にとって矛盾律と充足理由律に従って整えられ規定されているように思われるかどうか」の問題である。矛盾を孕んでいないし、現実の世界に起こりうるものとも見なされるという意味で、リアリティのある創作は、「内的な可能性と外的な可能性」の外見を有している、という言い方もされている。しかし、論理学の概念を借りて説明しながらも、詩的な真実らしさは論理学で扱う命題の真実らしさとは異なり、前者は主観的なものにすぎないという点も同時に強調されている。そうした文脈で、ブレーマーは、ゴットシェートの『批判的詩論』第4章から次のような箇所を引用している。

> 「詩的な真実らしさと言うとき私が念頭に置いているのは、創作されたものと現実に起こると考えられているものとの間の類似性である。言い換えれば、ファーベルと自然の一致である。」

これに対してもブレーマーは、その類似が主観的なものにすぎず、読者に見抜かれなければ不合理なものにまでなってしまうことがある、との注釈を添えている。しかし、虚構の創作と受容の背後で機能している、肝心の想像力の原理については、ヴォルフ哲学に全幅の信頼を寄せていると見えて、ただヴォルフの『経験心理学』を指示するのみである[5]。

さらに、詩論の他の箇所を併せ読むと、ブレーマーの構想する詩論では、詩にとってリアリティは必然的な契機とされていないことが分かってくる。マルクヴァルトは、こうした結論を捉えて、ゴットシェートやスイス派などの同時代の詩論が、詩的リアリティという詩学上の規範を緩和することはあっても、その規範自体を疑問視することがなかった中で、その限定という点に関して、ブレーマーの論は大胆に後の時代を先取りしている、と評している。詩的なリアリティの抑制は、詩の全般に対して議論されている。

> 「詩的イメージは、何よりもまず、意味深長に、言い換えれば、象徴的になりうるものを言う。というのも、詩的イメージは、全ての部分を同時に有するものを表現する。しかも、これは創作されたものである(§77)。そのため、同時に存在する諸部分から、随意に、構成されている(§75)。従って、そのような部分から、そのような仕方で、そのような詩的イメージを構成することで、幾らかの類似性によって、他の事物を示すことができるのである。そしてこの点に、象徴的な意味合いが存する(ヴォルフ『経験心理学』§151)。・・・通常、人は正義や希望や英知などを表象するのにこうした詩的イメージを用いているので、詩的イメージを知らないという人はいないのである。」(S.171f.; §124)

「叙事的なファーベルも、同じように、意味深長で、象徴的なものとなりうる。叙事的なファーベルは、創作された出来事の語りから成る(§77,81)。つまり、ある主体に関する互いに継起する変化を語ること(§76,78)から成っている。しかも、思いのままに案出して、構成することができる(§75)。誰もが考えるように、そのような主体を選び、そのような変化をそのような秩序の中で与え、それによって類似性をもとに全く異なる内容を示すことが可能ならば、そうしたファーベルが意味深長なものになるということも許される話である。それを象徴的と言っても、寓意的と言っても、神話的と言っても、寓話的と言っても構わない。・・・劇的なファーベルについても同じことが言える。」(S.173f.; § 126,129)

詩人の手による任意の構成によって類似性をもたせることで、詩は象徴的な意味合いを帯びることができる、というのがここでの主要な論旨である。そのことを通じて詩的なリアリティが制限を受けるわけであるから、ブレーマーの詩学にとっては、詩の創作と受容に関して、現実との類比において物事をリアルに描く想像力と、類似性を根拠に隠された象徴的な意味合いを探る想像力とがともに主題化されて議論されている、と理解することができる。それは、やや切り詰めた言い方をすれば、不在のものを見せる想像力と、不在のものを隠して感じ取らせる想像力と言えるかも知れない。そしてこれが、ベーコンとともに詩の領域に想像力という悟性の能力を割り当てた知の分類に対して、その下位分類となっている基本的な対立軸である。ブレーマーの論がユニークなのは、「事物の区別に従って創作も区別されなければならない」(§77)として、そもそも表現対象の諸部分の構成が継起的か同時的かという点に従って詩を分類しているにも関わらず、詩人がその構成を自由に組み替えてしまうこともあっさりと認めて、時間／空間という分類軸とは独立に、リアリティや象徴性の問題を設定している点である。

有名なレッシングの『ラオコオン』論(1766)との比較を考えてみれば、その特徴は一層はっきりする。ブレーマーは、

「全ての造形芸術は、同時に存在するものに向かうのみで、変化や出来事やファーベルについては表現できない」(S,114; § 81)

と述べる一方で、

「我々の心のすべての表象は言葉によって表現できるし、従ってまた、すべての創作が言葉によって表現できる。そのことを我々は経験から周知の事実と考えている」(ibid.)

としていて、この後半の部分が二十数年後のレッシングの『ラオコオン』論とは異なる主張となっている。そのことは、ファーベル以外のジャンルとして、同時に存在する諸部分から構成されている「詩的イメージ」というものを想定している点からも自ずと明らかである。

有名となった『ラオコオン』論の主張は ——それがその書で主張された内容のすべてかどうかに

ついてはさらに議論の余地があるが――、絵画と詩という表現手段はそれぞれ、絵画は部分が同時的に並列している対象に、詩は部分が継起的に連続する対象に適している、ということであった。レッシングは、表現手段としての芸術を構成する諸部分を「記号」と呼んでいたので、結局、芸術作品を構成する記号同士の関係性は、対象となる事物を構成する諸部分の関係性を写し取らなければならないことになる。これが、しばしば漠然と「記号の自然性」の問題と呼ばれてきた周知のトピックであるが、そもそもは、受容者の意識にとってその意識を構成する観念の自然な配置とはどのようにあるべきかを考慮した帰結であった。その点で、『ラオコオン』論では、不在のものをリアルに表象する想像力の在り方が問題になっていたと言える。

同じように「記号」という言葉を使って言い表すと、ブレーマーの論考の場合、事物を構成する諸部分の関係に対して、記号間の関係性を組み替える自由度をレッシングよりも大きく設定していて、なおかつ、絵画と詩に対してそれぞれ異なる自由度を想定している、と言うことができる。言語芸術に与えられた自由度は基本的に無制約である。

言語を「記号」として捉える思想については、ブレーマー自身が明言している箇所も散見される。ブレーマーは、「言葉は思考の記号に他ならない」とし、言葉が他者に喚起できるのは、「言葉によって表現された表象や思考」と、そうした表象が心にもたらす作用しかない、とはっきり述べている（理論篇第3章、§119）。また、他者に対して起こることは自己自身に対しても起こるので、「言葉は事物を表象するのに、我々の心の中で、しばしば事物の代理として思考に入り込み、思考の速度や抽象や判明な認識、普遍的な認識等々に役立つことで、我々の助けとなっている」とも述べている（理論篇第5章、§215）。ここに見られるのは、心の中の表象がまず事物の記号であり、言葉はさらに表象や思考を結合して表現することが可能な記号である、という記号観であり、それと同時に、事物の代わりに言語記号を操作することが思考にとっては助けになる、という記号観でもある。

すでに歴史篇第1章において、ブレーマーは、アリストテレスがポエジーの本質は模倣にあると見ていた点についての検討の中で、次のように述べていた。

> 「言葉というのは、誰もが知っているように、我々の思考の記号であり、その思考が表象している事物の記号である。我々が表象する事物、すなわち、我々が表現できる事物は全て、現実に存在しているか、そうでないかのどちらかである。従って、全ての語りは、現実のものを対象とするか、現実ではないものを対象とするかのどちらかである。現実の事物を言葉で表現するのであれば、その事物を非常によく似た形で表象して、読者にありのままの姿を示すか、あるいは、その事物をまた別の形で写し取るかのどちらかである。前者の場合は事物を模倣していることになるが、後者の場合は模倣ではない。・・・普遍的観念に直接由来するような語り方は模倣とは言わない。何故なら、模倣とは、模倣された事物に似ているということだからである。しかしながら、そうしたことは、雄弁術ではごく当たり前のことで、それを非難する理由はない。たとえ言葉が表象された事物と類似性を有していなくても、言葉が表現しているイメージは事物と同じ形をしているものである。言葉によるそうした叙述は、複数の方法で、現実的な描写に準えていくことができる。」（S.20f.; § 23）

「著者の言葉は、読者のうちに、著者が言葉を通じて表現した思考を呼び起こす。そしてこうした思考が一緒になってまさに、著者が制作の際に目の前にしていた事物のイメージを呼び起こすのである。こうしたイメージがきわめてよく似たものであれば、読者は、画家や彫刻家がその事物を目の前にしているのと同然に、事物をよく表象することになる。それればかりではない。現実の事物を言葉で描くこうした技術は絵画に匹敵するだけにとどまらない。それは絵画よりもはるかに完全で、広大なのである。画家が私に表象させることができるのは、物体の外面的な形だけである。この点では、画家の技術の限界は、同時に存在しているものの概念よりも遠くには進めないということにある。しかし、言葉による巧みな叙述は、私に物体的でないものも物体的なものもうまく示してくれる。私たちに継起的な連関も、同時に存在する事物の連関も表象させてくれる。しかも、言葉による叙述は、単に事物の外面的な皮の部分に結びつけられたままということはなく、事物の最も内側の性質まで我々に見せてくれる。我々の心の奥底に隠された情熱、最も密やかな欲望もその枠外ではない。絵画や描写を模倣と言って構わないのであれば、言葉による自然でよくできた叙述がこの模倣という名を得たとしても、上述の理由からそれが非難を受ける謂われはないのである。」(S.21f.; § 23)

このあと、現実のものではない事物を対象とするリアルな模倣について議論され(§ 24)、アリストテレスは虚構の創作のみを模倣として認めていたので、アリストテレスの言う模倣とは、非現実の事物を対象としたものであることが確認される。さらに、アリストテレスが詩に求めるのは、リアリティのあるファーベルのみであることが、例証によって明らかにされていく。

ここまでの議論を総合的に把握するなら、事物－観念－言葉という記号関係とも言える関係性の中で、ブレーマーが中心的に問題としているのは観念の形成である。事物－表象－芸術という関係も、そうした言語哲学的な三項図式と同様の構造で理解されている。詩論の焦点となっているのは、観念や表象の操作に関わる想像力である。現実の事物であろうとなかろうと、模倣の対象となる事物があり、その諸部分の関係性に対して、表象されたイメージの諸部分の関係性はすでに組み替えられたものとなっていることが、ここでの議論の前提であり、絵画よりも言語芸術の方がより広範な組み替えをもたらすことが可能であると考えられている。そのために、言語芸術に介在している想像力は、レッシングの『ラオコオン』論とは異なって、模倣対象を規定している時間と空間には制約されず、思いのままの再現が可能となっている。そして、模倣の本質をファーベルという概念で規定する、アリストテレス以来の伝統に対する相対化も、実質的には、この点に発している。ブレーマーは、ファーベルという概念に模倣対象の継起的性格という要件を付与して、継起的ではない対象を模倣するファーベル以外の詩の規定である詩的イメージというものも認めた上で、さらに、ファーベルや詩的イメージに象徴性をもたせることも可能であるとして、不在のものを見せる想像力と、不在のものを隠して感じ取らせる想像力とを共に視野に入れている。このように、不在のものを隠したまま象徴的に感じ取らせるタイプの想像力が可能となる一つの理由は、想像力が言語記号の配置とその組み替えを司っているからである。言語記号の配置が再現的であれば、受容者は作品と

現実との類比に自然と想像が及ぶ。「画家や彫刻家がその事物を目の前にしているのと同然に、事物をよく表象する」。さらに言語記号の配置によって、絵画にはできない物事の本質を見せることや、その意味合いに象徴性をもたせて抽象観念を表現したりすることもできる。後者の場合、受容者は、作品と(「正義や希望や英知」といった)抽象観念の間にある一種の類縁性を想像することになる。

5　ブレーマーの歴史的位置

古くより、想像力は、記憶や理性を比較項とした形で語れられてきた。「記憶や習慣に縛られない」「非合理主義的な」空想という場合も、記憶や理性を比較項としている。しかし、想像力という能力の捉え方を振り返ってみると、その位置づけは、記憶に対しても、理性に対しても、常に一定というわけではなかった。想像力は、現実の事物を像として再生する能力としての面が強調される場合には、相対的に見て、記憶に対して近い位置に置かれてきたし、架空の世界を空想する能力としての面が強調される場合には、逆に、記憶との結びつきは弱められた。あるいはまた、感覚知覚の多様性を総合するといった側面や、意識要素を自由に結合することによって物事の隠された連関を見て取ることを助けるといった側面を捉えて、想像力に対して、現実世界を捉えようとする理論理性との関係で、概念的把握や推論の積極的支援者としての位置づけが与えられることがあった反面、逆に、現実に縛られない自由な空想が可謬性を孕むものとして非合理性の象徴のように捉えられることもあり、そうした場合には、想像された内容はむしろ個人の深層心理の投影物として解釈されたりもしてきた。一般に、想像力は「記憶と理性の間」で揺れ動いたり、「記憶と理性の間」という位置づけに対して揺れ動いたりしてきた。

想像力は「記憶と理性の間」にあるとする哲学的な理論モデルと、模倣は単純な複写ではなく、世界の根底にある理性的な結合を再現すると捉える詩学の理論モデルとの間には親和性がある。しかし、哲学的理性に対して、美学が美の問題の独自性を主張し始めると、こうした親和性が否定される方向へと議論は進む。そこには、模倣概念を単純な複写の意味へと切り詰めた上で模倣説を克服しようとする理論的態度とはまた別の、理性を一つの頂点とする理論モデルに還元することを否定する立場がある。哲学と美学の間に距離を置き、合理主義的契機とそれに還元されない契機とを二分し、「記憶と理性の間」ではない別の場所を想像力に用意しようとする立場と言える。

模倣説の根幹において模倣と想像が本質的に連関している様子を見定めるには、最終的には、詩学と哲学との体系的な親和性という問題にまで立ち入る必要があるが、歴史的に振り返ってみて、想像力の制御が問われていると思われる詩論でも、その問題を正面から取り上げ細部に至るまで綿密に考察している議論は少ないように思われる。啓蒙主義時代の詩学をめぐる局面において初めて、模倣説という形で詩の創作に関わる知識を体系化している詩論の構造と、近代的な認識論が与える悟性の能力論の構造とがどこまで接近し得たかという問いが、一つの明確な事例として立ち現れてくる。本稿で論じたブレーマーの詩学はそうした詩学への第一歩を独自の歴史観とも

に示す事例である。

一般には、啓蒙主義時代に理性と想像力の関係について論じることには、神学的な背景があることは否定できない。過度な空想の飛翔を否定する姿勢は、敬虔主義の極端に内省化する信仰に対して理性神学が向けた典型的な批判の姿勢でもあった。聖書から理性の批判に耐えない契機を削ぎ落とした合理主義者には、かつての宗教的真理の代替物となった道徳的真理を「想像」させるような物語を好む傾向が見られた。しかし、ブレーマーの著作には、神学や形而上学に対する詩学の結び付きを示唆するような箇所は見当たらない。ファーベルが与える結合の合理性といった点を強調する一歩手前のところで、まずは模倣説の復権を唱えている観が強い。ブレーマーの詩学は、修辞学的な文体規則に拘泥することを止めてヴォルフ哲学に基礎付けを求めることで、結果として、理性と想像力の関係から哲学と詩学の関係を問い直す議論の場を切り開こうとするものであったと見るのが妥当であろう。

---

[1] Brämer, Carl Friedrich: Gründliche Untersuchung von dem wahren Begriffe der Dichtkunst. Danzig, 1744. 以下、引用箇所の頁数は本文中で指示する。なお、献辞と序文には頁数が付されていない。

[2] ブルーノ・マルクヴァルトの浩瀚な『ドイツ詩学史』(1958,56)やクラウス・シェルペ『18 世紀のジャンル詩学』(1968)がこの著作に言及しているが、あとは、アルマント・ニヴェルが『ヨーロッパ啓蒙主義の文芸美学』(1977)に付している年譜の中にこの書の名が見つかる程度で、それ以外はこれまで研究史においてもほとんど触れられることがなかったように思われる。 Markwardt, Bruno: Geschichte der deutschen Poetik. Bd.1, 2.Aufl. Berlin, 1958. Bd.2 Berlin 1956 ; Scherpe, Klaus R.: Gattungspoetik im 18. Jahrhundert. Stuttgart, 1968 ; Nivelle, Armand: Literaturästhetik der euprpäischen Aufklärung. Wiesbaden, 1977

[3] ディドロ、ダランベール編『百科全書』、桑原武夫訳編、岩波文庫(1971) p.70-71

[4] シェルペは、「詩的イメージ」のみが象徴的であると解釈して、そこにあるファーベル概念に収まり切らない契機を考察することで、後の時代の象徴概念の準備をしたという位置づけをブレーマーの詩学に与えているが、そうした論考には単純な誤解があると思われる。

[5] 「我々がいかにして現実に存在しない事物のことを考えるのかという点については、従って、いかにして創作が我々の心のうちに生じるかについては、ヴォルフ氏が詳しく示している(『経験心理学』§138 以下)。それが感覚的なイメージによって視覚化されるということについてもヴォルフ氏が証明している(§148)。」(§81)